

地域×書店×図書館

【基調報告】

本をあるだけ、すべて

岡野裕行(皇學館大学文学部国文学科准教授)

1. 読後の読書

読書という概念について、和田敦彦は「たどりつくプロセス」と「理解するプロセス」の二つに分けている(『読書の歴史を問う』笠間書院・2014年)。和田が言うところの「理解するプロセス」とは、私たちが本を読み進めることでその内容を理解していくというような、読者自身の内なるプロセスを意味している。読書という用語は、この意味で用いられることが一般的だろう。

一方、「たどりつくプロセス」とは、何らかの本が時間・空間を移動することで、読者の手元に至るまでの移動のプロセスを意味している。このように本を移動させる役割を世の中で担っているのは、取次・書店・図書館・学校などの機関や人(身近な家族や友達など)である。また、本を移動させるための物流システムとしての交通網の整備はもとより、今日のネットワーク情報資源の流通における通信技術の発達なども関わってくる。先に述べた「理解するプロセス」に比べても、より広い意味で読書という概念が用いられている。

和田が指摘する「たどりつくプロセス」「理解するプロセス」という考え方は、読書という用語が一般的に持っているイメージ(本のページを捲りながら活字を目で追うという行為)について、時間軸上を過去に向かう形で拡張していると言える。つまり、本を手にとってページを捲って書かれた内容を理解するという行為の前段階として、「今自分が手にとっている本はどこからやってきたのか」という本の来歴を考えようとするものである。「理解するプロセス」は狭義の読書、「たどりつくプロセス」は広義の読書と言い換えることもできるだろう。

和田が指摘するように、自らの読書体験を考える際に、「たどりつくプロセス」という過去の時間に対して意識を向けることは確かに重要である。一方、読書という概念には、その本を読み終えた後の時間も含まれることになる。本を読み終えた後には、いったいどのようなことが起こる可能性があるのだろうか。言い換えれば、読書という概念について、時間軸上の未来の方向に拡張する

という見方もできるということである。私たちは本を読んだことで得た知識を、どこで活用しているのだろうか。それは書評のように書き言葉で文章化することもできるし、たとえばビブリオバトルのように話し言葉を用いることで言語化することもできる。また、集めてきたそれらの本は、いったいどこへと持ち運んでいるのだろうか。自分の本棚に並べておくのか、誰かにあげてしまうのか、あるいは古本屋に売ることによって誰か見知らぬ別の人のものに回してしまうのだろうか。そしてまた、本を読んだ後に本について語った言葉は、どこの誰に対してどのよう

に届いていくのだろうか。本を読む前、本を読む最中だけでなく、本を読んだ後のことも読書の一部として考えてみる。このような読後の読書のことを、本稿では「解き放つプロセス」と呼んでみたい。

2. 読書の縁(ふち) /どこまでを読書と呼ぶか

読書という行為は、どこかでつくられた本を何らかの流通ルートを利用することによって入手し(たどりつくプロセス)、それに目を通して文字を追うことで内容を理解し(理解するプロセス)、さらには自分のなかに溜め込まれた読書体験で得たものを個人的に記録に残したり、語りかけることによって誰かに伝えたりする(解き放つプロセス)、という一連の流れによって構成されている。しかし、このように読書という概念を広く捉えるようになってくると、その枠組みがいったいどういった範囲にまで及んでいるのかが、一見しただけでは分かりづらくなってしま

う。いったいどこまでが読書の範囲なのだろうか。読書の範囲を想定したとき、そこに立ち現れるものと想像される読書の縁は、いったいどういった形をしているのだろうか。こういった設問について考えようとしても、その縁について明確に言い切ることはおそらく困難である。とはいえ、そういった議論のための観点を提示することは可能だろう。

- A) 本の問題: 生産・流通システムや、保存・公開などのアーカイブに関すること
- B) 人の問題: 能力・習慣や他者との関係性、心身の状態に関すること

C) 環境の問題：読書環境や社会制度・技術に関する
こと

D) 時間の問題：時間の流れによって状況が変化する
こと

読書という一連のプロセスは、いったいどのような要素から構成されているのだろうか。人と人／人と本を結びつけるものについてだけではなく、それを妨げるものも含めて考えることで、読書という概念の領域を探ってみることができるだろう。

3. 合縁奇縁／本を仲介する

「たどりつくプロセス」についてももう少し考えてみたい。どこかで作られた何らかの本が、どういった経緯をたどって自分の手元にたどりつく。自分の手元に本が届くまでに、さまざまな他者がそのあいだに介在している。どのような本であれ、それらは誰かが作った本、誰かが並べた本、誰かが運んできた本である。誰かが売ったり買ったりあげたりした本であり、誰かがどこかで語ってみた本である。自分にとっての「たどりつくプロセス」の役目を担うのは、いずれも自分以外の他者である。自分自身はたどりつく先で本の到着を待っている存在であり、届いた本を読むことで「理解するプロセス」における主体となる者である。

一方、他者から見たときの自分自身の存在とは、いったいどのようなものだろうか。世の中の本の流通という仕組みという視点から捉えてみたとき、自分自身の存在は、ほかの誰かにとっての「たどりつくプロセス」を担う仲介者の一人になる。誰かに本を届ける役目を担う者である。本を読む人や本を読み終えた人は、どこか別の場所で本の到着を待っている誰かに対して、その本を届ける人にもなりうることになる。

そのときにキーワードとなるのは、本について「語る」ことである。ピエール・バイヤールは、本を読むこと以上に、その内容について自分の言葉で堂々と「語る」ことが重要だという指摘をしている(『読んでいない本について堂々と語る方法』筑摩書房・2016年)。

われわれは、本を読みはじめる瞬間から、いや読む前から、われわれのうちで、また他人とともに、本について語りはじめる。そしてそのあとわれわれが相手にするのは、現実の本ではなく、これらの言説や意見なのである。現実の本は遠くに追いやられ、永遠に仮定的なものとなるのだ。

他者と本について語り合うことになれば、現実の本にどういった内容が書かれているのかはそれほど重要なことではなくなってしまう。たとえ自分が読んでいない本、知らなかった本であったとしても、その本を誰かとの会話の材料とすることは十分可能である。

とはいえ、本について語ることは一見すると簡単なように見えるが、実際にはそこにさまざまな制限がついてまわることになる。現物の本が入手できない。本を読む習慣がない。本を語る時間がない。本について語る相手がない。どんな本があるのかを知らない。どんな本があるのかを知るきっかけがない。読書を妨げるものたちは、気がつけば私たちの目の前に次々と現れてくる。それでは、私たちは本について、いつ、どこで、誰と、何について、どのように語れるだろうか。そのためには、どういった仕組みが必要となるだろうか。

4. 本があったらなにをする？

本という言葉の後ろには、さまざまな動詞をつなげることができる。たとえば、本を読む、というように言うことができる。たとえ本を読むための時間や体力が自分に足りないことがわかっていても、そこにある本をあるだけすべて読みたい、などと思ったりすることができる。

本を探す、本を売る、本を買う、本を貸す、本を借りる、本を作る、本を書く、本を読み上げる、本を聴く、本を運ぶ、本を取る、本を届ける、本を見つける、本を選ぶ、本を捲る、本を見る、本を見せる、本を並べる、本を撮る、本を伝える、本を隠す、本に言葉を添える、本に傍線を引く、本に書き込みをする、本に夢中になる、本に没頭する、本に溺れる、本に埋もれる、本が現れる。これらはすべて人と本との関係を言い表したものであり、その形は実に多種多様である。そしてまた、読書という概念に含まれる本との付き合い方の多様性を表現したのものである。

たとえば、木漏れ日の下で、本と寝ころぶ。本に眠りに誘われる。本と一緒に眠る。本とともに過ごす。これから先、あと何冊の本を読めるのかはわからないし、誰とどんな風に本の話を楽しめるのかもわからない。あなたも私も、誰もが読書につかえる時間には制約があるという現実がある。そうであるならば、改めて読書との付き合い方について、本のこれまでとこれからのことについて、一緒に考えてみることに意味があるだろう。本について考えていくための場所をつくってみたい。なぜ私は今日この本と出会い、それを手に取るようになったのか、その本について誰かと語り合うことができたのか。

そこで出会った読書の形は、単なる偶然のできごとと呼んでしまっても良いのだろうか。ブックピクニックという本を介した交流の場をつくり上げたことで、そこにどういった読書の形が現れたのだろうか。

【報告】

地域とつながる学生協働の取り組み

三木彩花（皇學館大学附属図書館学生サポーター

「ふみくら倶楽部」前部長／国文学科 4 年）

岡村真衣（皇學館大学附属図書館学生サポーター

「ふみくら倶楽部」現部長／国文学科 3 年）

1. ふみくら倶楽部の設立とこれまでの活動状況

ふみくら倶楽部は、皇學館大学附属図書館の学生協働団体として、2016年2月に発足しました。2018年6月より私が4代目部長を1年間務めた後、2019年6月から岡村さんに5代目部長を引き継ぎました。普段は図書館職員の方と一緒に、大学図書館での展示や書架整理などを行っています。これまでに「階段で怪談」「落ち着ける空間」などの展示を行ってききましたが、なかでも特に注目されたのは、2018年4月に行った単位と履修についての新入生向けの展示でした。教務担当とのやりとりを通して、単位や履修について新入生の悩みに寄り添った展示を作りました。内容を更新して今年度も実施しましたが、次年度以降も恒例の展示にしたいと思っています。

また、ふみくら倶楽部は学外のさまざまな人たちとも積極的に交流しており、本を通じた地域活動も行っています。サークル発足の初年度には、ウィキペディアタウン伊勢を開催しました。講師のウィキペディア日本語版管理者の方と一緒に伊勢の街を歩き、「伊勢うどん」などのウィキペディアの記事を更新しました。そしてこの年から伊勢河崎一箱古本市も主催するようになり、地元の本屋ぼらんさんとともに、ふみくら倶楽部のメンバーが運営として関わるようになります。伊勢河崎一箱古本市は今年度で第5回目の開催となり、常連の出店者の方からは「日本一優しくて親切な一箱」と言っていたかまでになりました。

私たちは皇學館大学附属図書館のサポーター団体として、大学図書館内での活動を日頃から行っていますが、一方で学外での地域連携にも継続的に取り組んでいます。大学図書館における学生協働の取り組みは、大学図書館内だけでなく、館外や学外にも飛び出すことができるも

のと私たちは認識しています。これはふみくら倶楽部の発足時から先輩たちが行ってきたことで、そのような活動を当たり前ものとして始めることができたという部分が大いと感じています。

活動の初年度から毎年続けている伊勢河崎一箱古本市は、本を活用した地域連携事業と位置づけていますが、2018年にはそれとは異なる形の新しい本のイベントとして、ブックピクニックを立ち上げる企画が動き出しました。

2. ブックピクニックをどのようにつくり上げたのか

ふみくら倶楽部がブックピクニックに関わるようになったきっかけは、私たちの顧問である岡野先生が、少女まんが館TAKI1735の志村さんから依頼を受けたことでした。ブックピクニックの概要と、屋外で本と人／人と人が繋がるというコンセプトを最初に聞いたときは、一箱古本市と似ているという印象を受けました。しかし、一般参加者が自分の蔵書をフリーマーケットの形で販売する一箱古本市とは異なり、ブックピクニックの出店者は地元の本屋さんや図書館であると聞き、一箱古本市で見てきたようなアットホームな温かさとは、また違った趣旨のイベントなのだと思います。

イベントの内容を決めていく話し合いには、私も積極的に参加することで、ふみくら倶楽部としてどのように関わっていいのかについて意見を出しました。打ち合わせをするなかで、事前の広報活動や当日の会場案内、ビブリオバトルの実施なども決まってきました。また、「木漏れ陽の下で読みたい一冊」を選書して掲示することや、ふみくら倶楽部として「映える本」をテーマとした展示をする、ということも決まっていきました。

「映える本」のテーマ展示は、選書の選択肢が狭まらないように、「映える」という言葉の意味をできるだけ広くとりました。中身の描写が映えると思う本でもいいし、装丁が綺麗だと思う本でもいいと考えることもできます。ふみくら倶楽部のメンバーには、自分がこれこそ「映える本」だと思う本を選んでPOPを書いてもらいました。展示の制作にあたっては、自分にぴったりな本と楽しく出会える場になってほしいという思いを込めました。展示スペースはそれほど広くできませんでしたが、レイアウトにもこだわった素敵な展示になっていたと思います。

3. ブックピクニックに関わる

ここまで、ふみくら倶楽部がどのような目的で活動している団体なのか、また、ブックピクニックでは具体的にどのような関わり方をしたかについて書いてきました。

今日では、私たちのような附属図書館のサポーター団体は全国のさまざまな大学図書館に広まっていますが、学外団体との連携企画を積極的に行っているふみくら倶楽部のような活動は、一般的な学生協働の枠組みにとらわれていないように見えるというご意見をいただくことがあります。私たちふみくら倶楽部は、なぜこのような形で活動の領域が広がってきたのでしょうか。これは私たち学生だけの力ではなく、周りで支えてくれる大人の存在があるからだと思います。

前述したように、ふみくら倶楽部がブックピクニックに関わることになったのは志村さんからの依頼がきっかけであり、指導教員の岡野先生が私たちも関わるように勧めてくださったことです。これはブックピクニックだけでなく、ほかのイベントにも共通しており、毎年恒例となっている伊勢河崎一箱古本市を始めとして、新しい活動が始まるきっかけは、岡野先生や大学図書館の司書さんたちからの提案によるところが多いです。そして、私たちがそれを断ることはまずありません。提案の内容がどれも興味深いということもありますが、先生や職員さんたちが「私たちがやることに口出しせず自由にさせてくれる」「困ったときは助けてくれる」というように接してくれることを知っているからです。

ふみくら倶楽部を支えてくれる人たちは、さまざまなことを気軽に任せてくれます。任された私たちはそれに取り組んでみるわけですが、これがもし「ああしろこうしろ」と一方的に指示されるだけならば、私たちはただ無償労働するだけの役割でしかありません。しかしふみくら倶楽部では、「やってみない?」「好きなようにやってみなよ」というように、ぼんと大きな仕事を任せてもらえます。もちろん話の大枠は決まっていますが、アイデアを具体化するなかで自分たちのやりたいことをやらせてもらえて、立ち止まったときはそっとアドバイスをくれる人たちに囲まれています。

私がメンバーとして加入した団体設立当初はよくわかっていませんでしたが、活動が4年目となる今となっては、そういう活動の進め方が当たり前になっている状況がとてもありがたいことだと思っています。

4. ふみくら倶楽部を動かしてきた信頼関係

学外イベントだけではなく、普段の大学図書館内での活動も同じことだと思います。大学図書館の司書さんたちは、私たちの「こんな展示がしたいです」「図書館でこんなことしてみてもいいですか?」という提案に対して、いつも全力で向き合ってくれます。学生の立場にいる私たちだけでは、こういった活動をすることはできません。

私たちを見守ってくれる人たちの存在が必要不可欠です。

これまでの4年間で築き上げてきたお互いの信頼関係は、とても重要なものだと思います。大人に一方的に指示されて動くだけの活動ではなく、自分の力を伸ばせる場所があるということは、本当にありがたいことです。

私は今年度の活動までしか参加できませんが、来年度以降もブックピクニックを続けてほしいと思いますし、後輩たちにはさらに新しい活動にも取り組んでほしいと思います。また、ふみくら倶楽部の後輩たちだけでなく、全国各地の学生協働に関わる学生や教職員の皆さまに、こういったイベントづくりの楽しさが伝われば嬉しいです。

【報告】

「本と人～風が行き交う場所で」—図書館にできること

高橋直子（多気町立勢和図書館）

はじめに

勢和図書館は、1997年7月、勢和村立図書館としてオープンし、その後2006年1月に合併、多気町立勢和図書館となった。現在、町内に2公共図書館、5小学校、2中学校があり、各校に学校司書が配置されている。

1. 勢和図書館のめざしてきたもの

入口のドアに「本と出会い、人と語り、心を結ぶ」と掲げている。これは開館当初から今も大切にしているキャッチフレーズである。そして当初、こんな図書館になればいいと願っていたことが3つ。

- ・さわやかな風が行き交う図書館
- ・元気が出る図書館
- ・持ち寄り分けあいの場に

2. そのための取り組み

そのために、本来の図書館の姿を知っていただき、使って良かったと実感してもらえるよう、「日常」を大切にしてきた。丁寧に誠実に選書し、レファレンスに応え、棚づくりをする。この繰り返しがあってこそこの図書館だと考える。そして、間口を広げるためにも、さらに楽しんで使っていただくためにも、「図書館、こんな出会いがあります!」と多彩なアプローチをしてきた。講座・講演会・コンサート・ドキュメンタリー映画上映会・写真展などである。来館して下さる方も着実に増えてい

った。

最初の9年間、開館から合併までは、勢和村内で着実に図書館の本質を位置づけようとしていた、基礎作りの時代であったと思う。内容的にも、「中小レポート」に謳われていた「貸出・児童サービス・全域サービス」を重視。開館当初からおはなし会を開始し、図書館キャンプを開催、早くからブックスタートも導入、地域の方たちと学校図書館司書配置運動にも取り組んだ。配置後、その方たちが図書館応援団的なサークルとなって下さり、子どもゆめ基金助成活動など積極的に協働していく方法を生み出した。

そして合併。地域が揺れ、地域のアイデンティティーが失われてしまうような危機感を感じた。この時期、同じ思いを持った地域の様々な事業所や団体から、ぜひ図書館と一緒に何かやってみないと、コラボ依頼が増えたのである。そこで、その人たちと学びの場をつくり、「図書館で学ぶ、つながる」プロジェクトを展開、地域の課題解決のためのブックトークを取り入れ、連続講座も企画した。それが「食農・伝承・手仕事プロジェクトおまめさんかなあ」につながり、さらに、小学校のコミュニティスクールへとつながっていく、という大きなうねりができた。

一方、“図書館を地域の縁側に”と、「ほんとカフェ」を開始。そのための仕組みづくりでは、サークルの方たちと何度も協議し、より良い形を導き出すことができた。そのムーブメントが定着していく過程で、さらに図書館や図書館のある「ゆりの丘」の魅力を発信したいと、移住者を含めた若い世代から注目されるに至った。その方たちが主催した「丘の上のだんらんマーケット」で図書館は「ピクニックライブラリー」を企画。好評を博した。その後、図書館開館20周年を、地域のみなさんが主催し祝ってくださる「本の森20th誕生祭」が開催され、そして今年のBOOK PICNICへとつながっていった。

3. BOOK PICNIC の可能性

これまで様々な形で、連携事業・コラボ企画を行ってきたが、今回、大きく違うのは「少女マンガ館 TAKI 1735」さんも「皇學館大学ふみくら倶楽部」さんも、他の出展者さんたちも、「本」という大きな共通テーマを、すでにそれぞれが自立した形で内実化しているということだ。本と人が出会うことのすばらしさや有用性が、すでに価値観として共有されている。これは、なんとも嬉しく頼もしいことであった。

さらにそこを“図書館という機能・しくみ”を再確認していただく場にできたとしたら、それは私たち図書館

だけではとてもなし得ない、大きな発信力・PR力になっていくのではないかと考えた。

そこで今年度のBOOK PICNICでは、「課題解決にはたとえばほら！ブックトーク」と「ギャラリートーク」を企画した。前者は、それぞれ専門領域について語ってくださるお話のあとに、司書のブックトークをセッションするというもの。お話を聞いてそのテーマをさらに調べたい時、スマホで検索、ではなく、「司書を使ってみる」という体験になれば、と考えた。一方のギャラリートークは、ひとつの課題を設定して、司書とともに図書館の書架をめぐっていただき、司書がそれぞれの棚から関連本を抜き出しその場で紹介していく、というものである。

図書館にある「本」とは、様々なジャンル・レベル・視点のものが多岐に渡り、体系だっているということ。図書館にいる「人」とは、レファレンス（案内・紹介・調査）する人であるということ。つまり図書館は、生きていくために必要な様々な疑問や課題を解決するための判断材料が、たくさん並んでいて、つないでくれる人がいるんだ、という体感になればとの思いである。

そして、無料で、誰でもいつでもアクセス可能、ということが保障されており、さらに、これからの社会について、その判断材料を使い、みんなで語り、考え、創り出すことができる場であることも保障されている。図書館は「自立と共生を支える場」で、それが、民主主義の柱といわれている所以であり、社会にとってなくてはならない不可欠な機能であると、今回、再認識していただけたら嬉しい。

4. これからの展望・図書館の役割

ネットで調べれば十分、SNSでつながっているから大丈夫。このような傾向が加速している。しかし、ネットだけでは不十分、SNSだけでは不安定。比較検討すること、裏をとること、言葉や笑顔を交わすこと。きっとそれらが、本来の人としての在り様、社会の在り様を支えてくれるはずだと考える。

図書館は、人と人が行き交う場、人と人がつながる場。ここにすれば息ができるのだ。これからも社会の中にあり続けるよう、使って使って使い倒していただき、存在を守ってくださるようお願いしたい。そして私たち司書も、図書館が、自由なさわやかな風が行き交う場所としてあり続けるよう、努めていきたい。

ここで、先日の「BOOK PICNIC 2019」で行った「課題解決にはたとえばほら！ブックトーク」を紹介させて

いただく。どうぞよろしくお願いいたします。

ブックトーク～